

昭和初期の皇族軍人の政治的活性化

小田部 雄次

I はじめに

1 二・二六事件と皇族軍人たち

昭和十一年（一九三六）二月二十六日、二・二六事件が勃発すると、皇族軍人たちは各人各様の動きを見せた。迅速に動いたのは軍令部総長の伏見宮博恭王であった。伏見宮は事件当日の朝に参内し、速やかな内閣組織と戒厳令を発令しないことなどを天皇に上申する。事件鎮圧よりも、事件を引き起こした青年将校らが作りだした政治的混乱を利用して新内閣を組織することに心が動いていたのである。一方、参謀総長の閑院宮載仁親王は小田原の別邸にいた。この間、暫定内閣首班に伏見宮博恭王または東久邇宮稔彦王を推す動きがみられ、あるいは真崎甚三郎を首班として伏見宮を内大臣に願う声もあがった。夕方になると、天皇

の三弟である高松宮宣仁親王から、次弟の秩父宮雍仁親王が「御見舞の為御上京」を希望しているとの電話が宮内省に入った。さらに、同日午後十時半ごろから十二時まで、皇居にて明治天皇の内親王を妃としていた朝香宮鳩彦王と東久邇宮稔彦王が、宗秩寮総裁兼内大臣秘書官長の木戸幸一と、事件について種々の意見を交換した。⁽¹⁾

翌二十七日にも、伏見宮の参内、朝香宮および東久邇宮と木戸の会見、上京した秩父宮と高松宮が会見してその後天皇皇后と会食と、皇族たちの慌ただしい動きがあった。この日の朝、朝香宮は海軍大学校に高松宮を訪ね、「此際皇族が宮中に集り速に後継内閣の組織を為さしむる様進言したきを以て高松宮より召集相成度」と述べたが、高松宮は「集まることは兎も角も」、「徒に御心配を増すものなり」と婉曲的に拒否した。⁽²⁾

事件発生から二日後の二十八日、ようやく参謀総長の閑

院宮が小田原から上京した。⁽³⁾ 他方、この日、主な皇族軍人が集合して参内し、皇居の葡萄間にて「皇族としての所見の統一」をはかろうとしたが、「別にそうしたこととも定まらず」、席上、伏見宮が高松宮に、秩父宮とともに「弟としてお上をおたすけして呉れ」と述べ、感泣したという。集まった皇族は、秩父宮、高松宮、伏見宮のほか、久邇宮朝融王、朝香宮、東久邇宮、梨本宮守正王、竹田宮恒徳王ら八名であった。⁽⁴⁾

このように、二・二六事件勃発に際して、皇族軍人たちの多くは迅速な対応を見せた。しかし、彼らの動きは「速かに暴徒を鎮圧せよ、秩序回復する迄職務に励精すべし」⁽⁵⁾とした昭和天皇の毅然たる態度に則した統一的なものではなく、各人各様の思惑がからんだものであり、なかには事件の混乱を利用していこうとする気配を示した皇族軍人もいた。

二十八日、昭和天皇は広幡忠隆侍従次長に、事件に対する「各皇族の御態度」につき以下の感想を漏らし、木戸幸一にも伝えるよう指示した。

高松宮が一番御宜しい。秩父宮は五・一五事件の時よりは余程お宜しくなられた。梨本宮は泣かぬ許りにして御話であった。春仁王は宜しい。朝香宮は大義名分は仰せになるが、先鋭化して居られて宜しくない。

東久邇宮の方が御判(り)になつて居る。⁽⁶⁾

昭和天皇は、皇族たちが天皇である自分の意にどこまで沿った言動をとっているのか、冷静に観察していたのである。さほどまでに、皇族軍人たちは天皇の心中を忖度できないでいたのである。本来なら最上層の「皇室の藩屏」として、天皇の意を十全に尊重し保持しなければならぬ皇族軍人たちが、なぜ天皇を悩ませる自己主張を展開したのであるか。その本質的な原因は、天皇と皇族という近親関係が古来から有してきた相互矛盾の構造にあるのだろう。つまりは血統継承という原則は、その先祖と子孫をつなぐ有機体としての存在に価値があり、個々の天皇自身は連続する皇統をつなぐ部分でしかなくなる。そのため、個々の天皇は「皇祖皇宗」に従属していく。さらに、皇位継承は血族であれば可能であり、血族中の誰にも「皇祖皇宗」を主張する権利がある。そうした構造にあつては、ときに個々の天皇は、皇族によつて「皇祖皇宗」に対する過つた言動を糾弾されることもありえたのである。しかも「皇祖皇宗」は、それぞれの皇族の觀念の中に存在するものであるから、伝統や先例といった一種の思い込みで成り立っている。そのため、新時代に対応する改革や論理は常に「皇祖皇宗」の名の下に抑止されやすいのである。

また歴史的な遠因としては、幕末維新以来の天皇と皇族

との関係のあり方があげられよう。幕末維新时期に政治的権力と権威は徳川幕府から朝廷に移ったが、新たな国家の頂点に立った天皇は、その権力と権威を保持するために、未だ法的整備が整わないうちに新たな多くの皇族を創出した。法的に定義されない皇族の存在は、古来の同族集団と類似の性質を持ち、皇位継承順位などは法制化されたが、個々の政治局面における天皇と皇族の関係は流動的のままであつた。加えて、維新以後、天皇も皇族も陸海軍軍人となることが義務づけられ、軍事組織のなかに組み込まれた。そのため軍事組織内における序列関係などが天皇と皇族の間に新たな緊張を生んだのである。

そして昭和天皇と皇族軍人をめぐる確執の近因としては、昭和五年（一九三〇）のロンドン海軍軍縮条約締結問題における条約派と艦隊派の対立がある⁽⁷⁾。条約締結に反対する海軍軍令部を中心とした艦隊派が皇族軍人である伏見宮博恭王（当時は大将）を担ぎ出して、条約締結を進める条約派に異議を唱えたのである。天皇自身は条約締結を進めようとしており、このため艦隊派は皇族の権威をもって対抗しようとしたのである。

このロンドン海軍軍縮条約締結問題以後、軍部を中心にした政争の様々な局面で多くの皇族軍人たちが関与した。昭和六年に東久邇宮は幕末烈士顕彰に尽力していた元宮内

大臣の田中光顕とともに農本主義者の橘孝三郎が運営する愛郷塾（翌年、五・一五事件に関与）を訪問し、右翼団体の手先となるのではないかと懸念された。また、秩父宮は昭和六年に陸大を卒業して歩兵第三連隊第六中隊長となり、革新派の青年将校たちから天皇の次弟としてのみならず、昭和天皇に代わる新天皇としても仰がれていた。昭和十年には閑院宮が皇道派巨頭の真崎甚三郎教育総監を更迭し陸軍派閥抗争に拍車をかけた。こうした皇族軍人の政治的活性化のなかでも、軍令部長（のち軍令部総長）となった伏見宮と、参謀総長となった閑院宮の動きは、軍上層部であり皇族軍人の長老であつただけに重要であつた。しかも、前述した二・二六事件当時の天皇の皇族への感想には、この二人がふくまれていなかったが、それだけ天皇にとつても簡単に人物評を口外できないほどの重要な存在であつたといえる。以下、伏見宮と閑院宮の昭和初期の政治的活性化の具体像をみておこう。

2 ロンドン海軍軍縮問題における伏見宮博恭王

皇族軍人の政治的活性化を先導したのは海軍の伏見宮博恭王であり、昭和六年以後の暴力的な社会変革の前提にあつたのが、昭和五年のロンドン海軍軍縮条約締結問題における海軍の反対運動であつた。同条約締結において、日

本内部では政府と、対米七割に固執する海軍軍令部が、補助艦保有率をめぐって意見を競い、条約締結を進める政府は軍令部の捨て身の攻撃にさらされた。つまり、軍令部長の加藤寛治、東郷平八郎元帥、伏見宮博恭海軍大将らは、こぞって政府の締結方針に抵抗をみせたのである。

財部彪海軍大臣はこうした軍令部の反対をおしきって締結を実現させ、昭和五年五月二十五日に昭和天皇から「非常に御念の入った力強い御声で『御苦勞ぢやつた』との言葉を得た。財部は「恐懼に堪へなかつた」との言葉を元老西園寺公望の私設秘書である原田熊雄に語り、さらに「皇族方が責任ある相当な高い立場に立たれてからいろいろ議論せられると非常に困る場合がある」と述べた。財部は条約締結を進める条約派に対抗する艦隊派のなかに皇族である伏見宮博恭王がいることが、今後の日本政治に大きな障害になることを感じていたのである。

実際、財部が天皇のねぎらいの言葉を得てから二ヵ月後の昭和五年七月二十日に、伏見宮が天機奉伺し、「軍縮のことについてお話し上げたいと思ひますが、おきき下さる思召がございませうか」と直接尋ねた。天皇はただ黙って返事をしなかつたので、伏見宮はそのまま下がった。天皇は牧野伸顕内大臣を呼び「いま伏見大將宮が自分にかうかう言はれたが、自分はいまきく時期ではないし、またきき

たくもないと思ふ」と述べ、さらに「さふいふことを侍従武官を以て伏見宮に伝へたいと思ふがどうだらうか」と相談した。牧野は「至極適当な御処理」と思い、「仰せの通り遊ばしたら結構でございます」と返事して引き下がった。このやりとりは、鈴木貫太郎侍従長から元老西園寺へ、「御思慮深い御処置に対しては実に恐れ多い話だが安心である。陛下はしつかりしてをられて盤石の安きにをられるから、公爵「西園寺」にもどうか御安心なさるやうに」と伝えられた。⁽¹⁰⁾

憲法や法令を遵守して非公式の上申を避けようとする天皇の毅然たる態度は、側近を安堵させた。しかし、軍令部のみならず国防国家をめざす諸勢力は、公式の場で本心を明示しにくい天皇の立場を逆手にとつて、天皇の本心が側近によつて妨げられているという「君側の奸」の構図で条約派を攻め立てていった。すでに同年四月十二日、侍従次長の河井弥八は、艦隊派の勢力下の右翼団体が側近攻撃をしている情報を得ていた。⁽¹¹⁾

天皇の本心を側近攻撃で封印していく手法は新奇なものではなかつたが、攻撃する側に皇統にたらなる存在がなければ、こうした手法も実質性がなかつた。つまりは、伏見宮が天皇の側に立たず、反対勢力側に担がれた、あるいは伏見宮自身が天皇の意に反したがために起こった騒動で

あった。財部はこの渦中であつて、「キングの側に付いてゐる名譽職」のようなイギリス国王付侍従武官に類する副官制度を提唱した。伏見宮のように「キングの側」につかない皇族の政治関与に違和感を持ったからである。⁽¹²⁾ 体験に基づいた賢明な提案であつたが、「キングの側」につこうとする従順な皇族は少なく、実現はしなかつた。昭和七年二月二日に伏見宮は海軍軍令部長に就任し、以後、昭和十一年の二・二六事件では陸軍皇道派の真崎甚三郎擁立に奔走したり、昭和十六年に軍令部総長を辞任して後も、天皇が対米外交交渉の道をさぐっているさなか「米国とは一戦避け難く」と早期開戦を主張するなど、「キングの側」につかない言動がめだつた。⁽¹³⁾

3 陸軍派閥抗争における閑院宮載仁親王

陸軍の閑院宮載仁親王も「キングの側」につかなかつた皇族の一人であつた。日清日露以来の戦闘経験のある載仁親王は、大正期には皇族軍人の長老筆頭として皇太子裕仁親王の欧州外遊に随伴した。外遊では常に裕仁親王の身边にあり、その先導や護衛の任を努めた。⁽¹⁴⁾ 皇太子時代から昭和天皇の信任が篤いと思われた載仁親王であるが、昭和期になつてからは、時代に対応できない無能な皇族としての印象を残した。とくに、昭和六年（一九三一）十二月二十

三日に参謀総長となつて以後の言動は、天皇の心証を害し続けた。閑院宮が参謀総長となつた背景には、昭和六年の三月事件や満州事変などによる軍紀の乱れを皇族の權威で正そうという各界の意図があつた。三月事件の際には元老西園寺は、天皇や弟の秩父宮雍仁親王、あるいは長老の閑院宮による軍の統制を期待していた。⁽¹⁵⁾ そして満州事変に際しては、若槻首相は軍の統制に「閑院宮の努力をわずらわすも一法なり」と述べていた。⁽¹⁶⁾

閑院宮が参謀総長になつた二ヶ月後に、伏見宮が軍令部長となり、陸海軍の国防用兵の最高責任者が皇族によつて担われることとなり、天皇との意志の疎通が円滑になつた。しかし、閑院宮も伏見宮も、「キングの側」に立つて軍を抑えるというよりは、政治活性化した軍に利用されることで、それぞれ陸軍や海軍の意向を直接天皇に上奏する立場となつた。

とりわけ閑院宮の場合は、政治的には無能に近く、陸軍内の派閥抗争に巻き込まれ、皇道派の真崎甚三郎教育総監更迭に関わつたとみなされ、皇道派の青年将校らの反発を買うようになつた。青年将校のなかには「閑院宮の総長御在職を陸軍の癌」とまで言う者もいた。⁽¹⁷⁾ 閑院宮が二・二六事件勃発時に小田原別邸にいて二十八日まで上京しなかつたのは、青年将校たちからの攻撃を避けるためであり、参

表1 二・二六事件当時の天皇と皇族軍人一覧 生年順

	名	生	薨・崩	陸	海	改元当時の主な階級・経歴〔数え年〕	世代
1	閑院宮載仁	1865(慶応1).9.22	1945(昭和20).5.20	1		元帥・参謀総長 [72]	A
2	梨本宮守正	1874(明治7).3.9	1951(昭和26).1.1	2		元帥 [63]	
3	※久邇宮多嘉	1875(明治8).8.17	1937(昭和12).10.13			(神宮祭主) [62]	
4	伏見宮博恭	1875(明治8).10.16	1946(昭和21).8.16		1	元帥・軍令部総長 [62]	B
5	朝香宮鳩彦	1887(明治20).10.2	1981(昭和56).4.12	3		中将・軍事参議官 [50]	
6	東久邇宮稔彦	1887(明治20).12.3	1990(平成2).1.20	4		中将・軍事参議官 [50]	C
7	伏見宮博義	1897(明治30).12.8	1938(昭和13).10.19	2		中佐 [40]	
8	山階宮武彦	1898(明治31).2.13	1987(昭和62).8.10	3		少佐・病気退官・予備役 [39]	
9	賀陽宮恒憲	1900(明治33).1.27	1978(昭和53).1.3	5		中佐・騎兵第10連隊長 [37]	
10	◎昭和天皇	1900(明治33).4.29	1989(昭和64).1.7	6	4	大元帥 [37]	
11	久邇宮朝融	1901(明治34).2.2	1959(昭和34).12.7	5		少佐・軍令部第3部員 [36]	
12	○秩父宮雍仁	1902(明治35).6.25	1953(昭和28).1.4	7		少佐・歩兵31連隊長 [35]	
13	閑院宮春仁	1902(明治35).8.3	1988(昭和63).6.18	8		大尉・騎兵学校教官 [35]	
14	○高松宮宣仁	1905(明治38).1.3	1987(昭和62).2.3	6		少佐・海軍大学校学生 [32]	
15	竹田宮恒徳	1909(明治42).3.4	1992(平成4).5.11	9		騎兵中尉・陸軍大学校学生 [28]	D
16	北白川宮永久	1910(明治43).2.19	1940(昭和15).9.4	10		砲兵中尉・陸軍野戦砲兵学校学生 [27]	
17	朝香宮彦彦	1912(大正1).10.8	1994(平成6).5.5	11		歩兵中尉 [25]	
18	○三笠宮崇仁	1915(大正4).12.2		12		陸軍士官学校生徒 [22]	

注：陸・海の数字は、皇族軍人数。◎は天皇、○は直宮、※は非軍人。賜姓華族および朝鮮王公族、三笠宮より年少者は除いた。

親王、王の称号は略した(以下の表も同じ)。

謀総長が自己保全のために身を隠していたという失態で、天皇はじめ多くの信頼を失った。伏見宮までもが「閑院宮の御態度は遺憾なり」と天皇に述べていた。⁽¹⁸⁾

II 皇族軍人の政治的活性化の背景

1 天皇と皇族軍人の軍人としての立場

「表1 二・二六事件当時の天皇と皇族軍人一覧」は、二・二六事件当時の天皇と皇族軍人たちの階級と年齢などをまとめたものである。天皇と非軍人である久邇宮多嘉王、病気退官した山階宮武彦王をのぞくと、最長老の閑院宮載仁親王から天皇の末弟である三笠宮までで陸軍一名、海軍四名、計一五名の皇族軍人がいた。便宜上、彼らを世代別に、天皇より二回り上の「長老(A)」、一回り上の「年長(B)」、「同世代(C)」、一回り下の「年少(D)」と四区分すると、長老は三元帥、年長は中将で軍事参議官、同世代は大尉から中佐の佐尉官級、年少は軍学校の学生・生徒たちとなる。

明治六年(一八七三)一月十日に国民皆兵の徴兵令が發布されると、同年十二月九日に「皇族自今海陸軍に従事すべく」の太政官達が宮内省宛に発せられた。これにより皇族男子は原則として陸海軍人となることが義務づけられた

のである。皇族軍人は職業軍人同様に軍学校に入り、部隊に所属し、戦地にも出征した。他方、皇族軍人は一般の職業軍人たちよりも昇級が早かった。さらに皇族軍人のなかでも天皇の弟である直宮、つまり秩父宮、高松宮、三笠宮（崇仁親王）の三皇族の昇級はさらに早く、天皇は即位と同時に大元帥となった（明治天皇はのぞく）。明治四十三年（一九一〇）三月施行の皇族身位令第十七条には、「皇太子、皇太孫は満十年に達したる後、陸軍及海軍武官に任ず。親王・王は満十八歳に達したる後、特別の事由ある場合を除くの外、陸軍又は海軍の武官に任ず」と皇族軍人たるべき年齢が明記されているが、大正元年（一九一二年）に満十三歳で陸海軍少尉となった皇太子裕仁は、大正十四年に満二十三歳で大佐となった。ここまでの昇級の早さもさることながら（ちなみに竹田宮恒徳王はかぞえ二十八歳で中尉であった）、その後、大正天皇の崩御にともなうて即位すると、将官時代を超えて大元帥となったのである。⁽¹⁹⁾

軍事組織に組み込まれた天皇や皇族たちは、近代の戦争や軍事的諸問題にも翻弄されるようになる。そして、皇族軍人の軍事思想も自らの戦地体験や留学経験などで形成され、大元帥たる天皇との間に微妙な意識上の齟齬を生むようになった。昭和初期における皇族軍人の政治的活性化の背景には、こうした天皇と皇族軍人との間の歴史体験や軍

事経験の違いが大きく反映していたようにもみえる。

ところで、昭和初期の皇族軍人の政治的活性化の前提となる明治・大正期の皇族軍人について、概略を述べておく⁽²⁰⁾。明治維新前まで、皇族たちは、朝廷の儀式に参加し、家芸に励み、歌を詠むのが日常であったが、幕末になって軍事化し政治化していった。戊辰戦争で活躍した有栖川宮熾仁、小松宮彰仁や、当初は幕府側に傾いていた久邇宮朝彦、北白川宮能久らの親王たちである。そして、徴兵令が公布された明治六年（一八七三）に「皇族自今海陸軍に従事すべく」の太政官達が発され、原則として男子皇族たちは軍人となる義務を負った。その総数は、直宮、朝鮮王公族、賜姓華族、士官学校や海兵在学中であった者もふくめれば、「表2 皇族一覧」に示したように、昭和二十年（一九四五）の敗戦までに、陸軍で二十八名、海軍で二十一名を数えた。この間、日清・日露戦争で出征した皇族軍人が、陸軍で八名、海軍で四名いた。

これらの皇族軍人たちには優遇措置があり、陸軍幼年学校、陸軍士官学校、海軍兵学校の軍学校は無試験で、陸軍大学校は試験を受けたが合格が約束されていた。皇族専用の宿舎もあり、少尉任官と同時に、身の回りの世話をする御付武官が配属された。進級も一般将校より早く中將に進み、師団長になった。

表2 皇族一覧(生年順)

	名()内は爵位	陸	海	最終階級・軍歴ほか
1	伏見宮邦家			
2	有栖川宮讖仁			(神祇事務総督)
3	山階宮見			(外国事務総督)
4	梨本宮守脩			
5	聖護院宮嘉言			(海軍総裁)
6	久邇宮朝彦			(神宮祭主)
7	有栖川宮讖仁	1		参謀総長
8	小松宮彰仁	2		参謀総長
9	北白川宮能久	3		大将(戦病死)
10	華頂宮博経		1	少将
11	伏見宮貞愛		4	元帥
12	清棲家教(伯)			(宮中顧問官)
13	有栖川宮威仁		2	元帥
14	閑院宮載仁		5	元帥
15	賀陽宮邦憲			(神宮祭主)
16	東伏見宮依仁		3	元帥
17	山階宮菊麿		4	大佐
18	久邇宮邦彦		6	元帥(神宮祭主)
19	梨本宮守正		7	元帥(神宮祭主)
20	久邇宮多嘉			(神宮祭主)
21	伏見宮博恭		5	軍令部総長
22	伏見宮邦芳			(病氣・廃嫡)
23	竹田宮恒久		8	少将
24	北白川宮成久		9	大佐(事故死)
25	有栖川宮載仁		6	少尉(病死)
26	朝香宮鳩彦		10	大将
27	東久邇宮稔彦		11	大将
28	小松輝久(侯)		○	中将(BC級戦犯)
29	二荒芳之(伯)			(ボーイスカウト理事長)
30	上野正雄(伯)		○	少将
31	李垠	□		中将
32	伏見宮博義		7	大佐(病死)
33	山階宮武彦		8	少佐(予備役・病氣療養)
34	賀陽宮恒憲		12	中将
35	山階芳麿(侯)		○	中尉(予備役・山階鳥類研究所所長)
36	久邇宮朝忠		9	少将
37	華頂宮博忠		10	中尉(病死)
38	久邇邦久(侯)		○	大尉(急死)
39	秩父宮雍仁		◎	少将(病氣療養)
40	閑院宮春仁		13	少将
41	高松宮宣仁		◎	大佐
42	筑波藤彦(侯)			(靖国神社宮司)
43	華頂博信(侯)		○	大佐
44	鹿島萩彦(伯)		○	大尉(早世)
45	葛城茂彦(伯)		○	中佐(被曝)
46	竹田宮恒徳		14	中佐
47	李鍵			中佐
48	北白川宮永久		15	少佐(事故死)
49	東伏見邦英(伯)			(東京帝国大学講師)
50	伏見博英(伯)		○	少佐(戦死)
51	朝香宮宇彦		16	中佐
52	李鐸	□		大佐(被爆死)
53	音羽正彦(侯)		○	少将(戦死)
54	三笠宮崇仁		◎	少佐
55	東久邇宮盛厚		17	少佐
56	宇治家彦(伯)		○	技術大尉
57	粟田彰彦(侯)		○	大尉
58	賀陽宮邦寿		18	大尉
59	龍田徳彦(伯)		○	大尉
60	賀陽宮治憲		○	兵学校学生
61	東久邇宮俊彦		○	士官学校学生
62	久邇宮邦昭		○	兵学校学生

陸・海の数字は、皇族軍人の累計数

◎は直宮、○は賜姓皇族で()は爵位、□は朝鮮王公族

2 日清・日露戦争と皇族軍人

表1の長老世代のうち、閑院宮載仁親王は日清戦争に従軍していた。日清戦争に従軍した皇族軍人は「表3 日清戦争時の皇族軍人一覧」に示したが、昭和初期まで、存命であったのは閑院宮のみであった。華頂宮(のち伏見宮)博恭王は、日清戦争当時はドイツ留学中であり、参戦していなかった。

閑院宮の日清戦争における「宮殿下の伝令使」なる「武

勇伝」は、戦争当時から広く喧伝されており、たとえば、「閑院宮殿下は伝令使となり弾丸雨中の間を切り抜け応援隊の立見旅団に駆け急報せられたり」などとある⁽²¹⁾。このエピソードは、日清戦争時の閑院宮の武人イメージの中核をなし、以後も明治四十二年(一九〇九)刊行の『皇室及皇族』には、その詳細な経緯が記され、さらに昭和八年(一九三三)刊行の『皇室皇族聖鑑(大正編)』にも、「勇敢にも御自ら砲煙弾雨の中を、御馬上の御英姿もいと凛々しく、敵弾御突破あらせられ」などとある⁽²³⁾。

表3 日清戦争時の皇族軍人一覧

	名	戦時中の階級と主な軍歴	戦後	薨去年
陸軍	有栖川宮熾仁	大将 参謀総長、大本営幕僚長、広島にて風邪で倒れる		明治28
	小松宮彰仁	大将 近衛師団長、征清大総督、宇品から旅順へ出征		明治36
	北白川宮能久	中将 歩兵第四師団長、近衛師団長、旅順へ出征	台湾接收中に、台南で倒れる	明治28
	伏見宮貞愛	少将 歩兵第四旅団長、威海衛作戦に従軍	混成第四旅団長、台湾接收に出征	大正12
	閑院宮載仁	大尉 第一軍司令部付、鴨緑江渡河作戦に従軍	少佐に昇進	昭和20
海軍	有栖川宮威仁	大佐 巡洋艦松島艦長・巡洋艦橋立艦長、澎湖島作戦に参加		大正2
	小松宮依仁	少尉 巡洋艦浪速分隊長、威海衛海戦・澎湖島作戦参加	台湾上陸作戦	大正11
	山階宮菊麿	少尉 巡洋艦吉野分隊長・巡洋艦高千穂分隊長、小松宮と同作戦	台湾上陸作戦	明治41
	華頂宮博恭	少尉 ドイツ留学中	帰国	昭和21

表4 日露戦争時の皇族軍人一覧

	名	戦時中の主な階級と軍職	薨去年
陸軍	伏見宮貞愛	大将 第一師団長、大本営付、遼東作戦従軍	大正12
	閑院宮載仁	中将 満州軍司令部付、大本営付、沙河作戦従軍	昭和20
	久邇宮邦彦	少佐 第一軍司令部付	昭和4
	梨本宮守正	大尉 第二軍司令部付、十里河にて赤痢感染	昭和26
	北白川宮(竹田宮)恒久	少尉 近衛師団司令部付、遼陽会戦で武官が戦死	大正8
海軍	有栖川宮威仁	大将 東宮輔導から大本営付へ	大正2
	東伏見宮(小松宮)依仁	大佐 巡洋艦千代田副長のち艦長、旅順港閉塞作戦・黄海海戦、日本海海戦、樺太上陸作戦	大正11
	山階宮菊麿	少佐 巡洋艦八雲分隊長、旅順港閉塞作戦	明治41
	伏見宮(華頂宮)博恭	少佐 戦艦三笠分隊長、旅順港閉塞作戦、黄海海戦で砲身破裂事故で戦傷	昭和21

閑院宮の「武勇伝」は日露戦争においても「僅々十二名の小部隊を躍進せしめて敵の予備隊の左側面を急襲し以て多大の損害を与へしかば」などと報道された⁽²⁴⁾。昭和八年の『皇室及皇族』にも、「殿下には、疾風迅雷の勢を以て、敵軍を突破し、瞬時に之を撃退して、我軍後顧の憂を除かせらる」など⁽²⁵⁾とあり、その武勲は広く伝えられていた。

他方、「表4 日露戦争時の皇族軍人一覧」にもあるように、日清戦争当時はドイツ留学中だった伏見宮(華頂宮)博恭も、日露戦争には海軍少佐として従軍した。しかも、砲身破裂事故に遭い、皇族の戦傷として耳目を集めた⁽²⁶⁾。博恭王の戦傷は、近年になって「敵弾」によるものではなく「事故」によるものであると指摘されているが、当時は「名誉の負傷」とし

て喧伝され、明治三十八年九月七日の『東京朝日新聞』は、「伏見若宮の御軍服」「伏見若宮の双眼鏡」の記事を掲載し、「激戦に御負傷ありたる博恭王殿下」の血染めの破裂した軍服や「イビツ」になった双眼鏡の絵を紹介した。昭和八年刊行の『皇室皇族聖鑑（大正編）』でも「畏くも敵弾の爲め、御胸部に名譽の御負傷を被り給ひ」とあり、博恭王の海軍での「カリスマ性」を高めていた。⁽²⁸⁾

もう一人の長老世代である梨本宮守正王は、日露戦争勃発当時はフランス留学中であつたが、四月に帰国し、第二軍司令部附の大尉（のち少佐）として宇品から大連へ出征した。その後、梨本宮は十里河にて悪性の赤痢にかかり重体となり、転地療養のため大分県別府温泉で回復につとめた。宮妃の伊都子には、その間の情報が軍から仔細に伝えられ、伊都子は「御重症にて一時は昼夜八十回計りの御下痢にて混血若しくは純血便を下し、昨今尚四十回位の粘液血便あり」「御看護申上た看護卒は感染してたほれ死んだとの事、又其他も同じ病にか、つたよし」と日記に記したが、⁽²⁹⁾『東京朝日新聞』では、明治三十八年八月二十八日に「一時は一昼夜数十回の御上廁ありし程なりしが殿下平生の御健康に依り昨今は略御快癒」と控えめな概要が報道されたのであつた。水や衛生状態が充分ではない戦地での疫病は、多くの一般兵士にとつても危険なものがあつたが、

梨本宮は皇族ゆえにその感染が目された。梨本宮のこうした戦地における疾病体験が、生来の温和な性格と相まって、後の政治的活性化の時期に自らを制する機能を果たしていたのかもしれない。

III 欧州を謳歌する皇族たち

1 「北伯爵」の交通事故

日露戦後、病気が回復した梨本宮はフランスへ再留学し、明治四十二年の卒業に合わせて伊都子妃もフランスに渡り、夫妻で欧州諸国の王室や名所を回るこゝとなつた。その時に、伊都子妃は欧州の進んだ文明に驚嘆し、かつ確固たる身分制度の社会に敬意と安堵を覚えた。伊都子は佐賀鍋島家の次女であり、日本では有数の資産家令嬢で、国内で多くの進んだ文化や文明にもふれてきた。しかし、欧州の最先端の文明の渦中であつて、その驚きを隠せなかつた。⁽³⁰⁾

こうした欧州と日本との文明格差は、第一次世界大戦後に新たな局面を見せる。文明格差は依然として残るが、日本の経済力が高まり、渡航して直接欧州世界に触れる機会が増えたのである。そして裕仁親王より一回り年長世代の皇族軍人たちが第一次世界大戦後の欧州に留学し、その物質的にも精神的にも先進的な環境から大きな影響を受ける

のである。大正十年三月の皇太子裕仁親王の欧州訪問に前後して、大正九年四月に東久邇宮稔彦王が、大正十年十一月に北白川宮成久王が、大正十一年十月には朝香宮鳩彦王が、それぞれ欧州へ留学した。奇しくも、東久邇宮ら三王は、明治天皇の皇女たちの嫁ぎ相手であり、七女の周宮房子内親王が北白川宮妃、八女の富美宮允子内親王が朝香宮妃、九女の泰宮聡子内親王が東久邇宮妃となっていた。六女の常宮昌子内親王は竹田宮恒久王妃となっていたが、恒久王は留学経験のないまま大正八年四月に薨去していた。つまりは、裕仁親王の年長の皇族軍人とは、裕仁親王の叔母の配偶者、すなわち叔父たちであった。

このうち東久邇宮は「東伯爵」の仮名で留学し、一少佐として平生は自由な活動を行い、公式の場合には日本皇族として臨むという方式をとった。これは当時の諸外国の皇族たちの事例をまねたものであり、いわゆる「微行」であった。このため「東伯爵」は現地では「コント・ヒガシ」として、内地での制約から解放された一市民的な生活を送ることができた。妃の泰宮聡子内親王も追って渡欧する予定であったが、結局果たせなかった。

東久邇宮渡欧の後、北白川宮も一少佐の「北伯爵」、朝香宮は一中佐の「朝伯爵」の仮名で留学し、それぞれ「コント・キタ」「コント・アサ」としてパリでの生活を享受

した。「北伯爵」が渡欧して十一ヵ月後の大正十一年（一九二二）十月には、北白川宮妃の房子内親王も「お出迎え」の名目で渡欧し、夫とともにフランス貴族に招かれ、狩猟やパーティを楽しんだ。房子妃より三週間遅れて朝香宮もパリに到着し、「東伯」、「北伯」夫妻、「朝伯」の四人の日本皇族がフランスで、日本では得られない「自由」を味わったのである。⁽³¹⁾

彼ら三人の皇族の欧州での言動が、内地で報道されることは少なく、その活動ぶりを知ることは稀であった。ところが、北白川宮が自ら運転して死亡した自動車事故が連日報道され、重傷を負った房子妃と朝香宮の回復状況とともに留学中の優雅で自由な生活なども報道された⁽³²⁾。事故のために皇太子裕仁親王の台湾行啓の日程が延期となるなどの支障もあり、宮内省は以後の渡欧中の皇族の監視を強めた。

2 「東伯爵」の帰国

東久邇宮は北白川宮の自動車事故当時はイギリスにおり、事故後は病床の房子妃や鳩彦王に代わって、諸方面への事後処理や接待に奔走していたが⁽³³⁾、留学期間が終えても帰国せず、パリの社交界で浮き名を流しているという噂も伝わった。東久邇宮自身「パリよいとこ、うかうか七年」と書いてるように、留学本来の目的を忘れて、欧州生活を

満喫していた。稔彦王は、モネ、ルノアール、ドガ、藤田嗣治らパリの画壇を支えていた人びとと交流を深めており、「モネの家は、パリから自動車で一時間ぐらいの、静かな田舎でしたが、美しい庭にかこまれて、庭の一部に日本式の庭園もありました。部屋の壁に日本の浮世絵がかけてあった。当時モネは頭髮の白い老人でした」と回想している。このモネの紹介で、第一次世界大戦時のフランス大統領であったクレマンソーと出会い、パリ講和会議での日本全権の態度や将来の日米関係などの世界情勢を論じた⁽³⁴⁾という。

東久邇宮の留学は、第一次世界大戦後の欧州社会を見聞させる目的で、参謀総長上原勇作が宮内省と外務省に交渉して実現させたものであった。通常は二年の留学であったが、さらに二年延期して政治科学大学で教育を受けた。そして、その後も滞在延期を求め、帰国を拒んでいたのである。聡子妃の渡仏も実現せず、大正十二年（一九二二）の関東大震災で次男の師正王が夭折しても、フランスに留まっていた。女性問題の噂もあり、陸軍省も宮内省も早期帰国を勧告していた。大正十五年十二月に大正天皇の容態が悪化しても、帰国命令に応ぜず、ようやく大正天皇崩御の翌日に帰国を決心し、アメリカ経由で昭和二年（一九二七）一月二十九日、七年ぶりに日本に戻った。このときで

も、東久邇宮は臣籍降下を主張したり、フランスから女性⁽³⁵⁾が追ってきたりと、波乱ぶくみだった。

東久邇宮自身は、「七ヶ年もフランスにいたので、いろいろなデマがとんでいたようでした」と、帰国が遅れた理由を「大正天皇から、非常にしかられたことがもととなって、日本に帰るのがいやだった気持ち」などいくつか述べるが、牧野伸顕内大臣らは「西洋かぶれした」と東久邇宮を非難している⁽³⁶⁾。東久邇宮の理由の客観的当否はともかく、フランスでの生活を満喫し、かつ日本の皇族のあり方に不満があったのは、確かだろう。この不満の本質的理由は、当時の宮内省の皇族への待遇の不十分さへの不満でもあった。当時、宮内省は経費削減を求めており、留学滞在費のみならず、国内の皇族への諸経費への抑制を進めていたのである。しかも、大正九年（一九二〇）五月十九日には「皇族の降下に関する施行準則」が内規として裁定され、長子孫の系統四世以内を除くすべての王は華族に降下することとなり、二世である東久邇宮も曾孫の代には華族となること⁽³⁷⁾が定められたのである。明治天皇の内親王を妃としながらも、将来的には皇族の地位と身分を失う定めにある宮家となった一方、欧州で「留学貴族」としての自由な空気になじんでおり、東久邇宮の内面に近代日本の皇族制度の矛盾へのこたわりが育っていたようにもみえる。

3 第一次世界大戦後の二つの潮流

話題は前後するが、大正三年（一九一四）から七年（一九一八）にかけて世界を巻き込んだ第一次世界大戦は、フランス、イギリス、日本などの連合国の勝利で終結したが、欧州国家の多くはその勝敗に関わらず大きな打撃を被った。航空機や戦車などの近代兵器や毒ガスなどの化学兵器の出現で大量殺戮が可能になったことは、戦後の厭戦感情を高めた。そうした潮流にあつて、世界恒久平和、戦争放棄をめざした国際的とりきめが進められ、国際連盟、不戦条約、軍縮条約などの設立や締結がなされていった。

一方、戦場とならなかつた日本は、その国際的地位が向上し、戦後世界の運営に関わつていった。日本はパリ講和会議に、西園寺公望を首席全権とし、牧野伸顕、珍田捨巳、近衛文麿、松岡洋右、吉田茂らをふくむ代表団を派遣した。もともと、日本の関心は、中国利権など日本の直接利害に関わる問題に集中し、世界恒久平和への動きは弱かつた。むしろ、近衛のように英米中心の平和主義に公然と異議を唱える気分さえあつた。⁽³⁷⁾つまりは、国際的地位が向上したとはいえず、当時の日本には、欧米諸国と対等ではないという不公平感があり、西園寺や牧野らのようにそれを忍従するか、近衛のように反発するかの二者択一の精神状況にお

かれていたといえる。また、第一次世界大戦後の欧州戦場の悲惨さを目の当たりにした日本の軍人たちは、二度と戦争はすべきではないという反戦・厭戦意識と、次の戦争で勝利するためには軍人だけではなく国家の人員や資源を総動員しなければならぬという国防国家建設への志向という、対立する二つの方向に分かれた。

東久邇宮ら、昭和天皇より年長の世代は、そうした欧州で、制約が多くかつ文化や文明が一時代遅れていた日本では味わえない貴族としての生活を満喫していたのである。彼らは病弱の大正天皇に代わつて皇室を支えるというよりは、皇室は皇后（貞明皇后）と皇太子（裕仁親王）に委ねて、自らの人生を自己実現させようとしていた面がなくもなかつた。

大正十年（一九二一）、皇太子裕仁も欧州訪問したが、身分を隠した自由な旅ではなく、次期天皇になるための学習であり、国家を負つた公式訪問であつた。裕仁は第一次世界大戦の激戦地であつたヴェルダンなどを視察し、「戦争というものは実にひどいものだ」との感想を持った。⁽³⁸⁾第一次世界大戦後の戦場を視察して平和を意識した人びとは少なくなく、たとえば水野広徳は海軍軍人で日露戦争の日本海海戦を描いた小説『此一戦』の作者であり軍国主義者として知られていたが、悲惨な戦場跡をまのあたりにして、

日本は「如何にして戦争を避くべきか」を痛切に感じ、軍を辞して反戦主義者となった。³⁹⁾

他方、第一次世界大戦の結果、次期戦争は国家総動員となるため軍部が政権を握り国防国家を建設しようと考え、勢力も生まれ、なかでも欧州滞在経験のある永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次ら佐官級の陸軍軍人たちが中心となって結成した「一夕会」が次期の国策や軍の人事などについて意見交換をするようになった。「一夕会」には河本大作、土肥原賢二、板垣征四郎、東条英機など陸士一五期から一七期が会員としてリクルートされた。また一八期以後で第二「一夕会」が結成され、山下奉文、石原莞爾、鈴木貞一、牟田口廉也、武藤章、田中新一、富永恭次ら加わった。彼らは、後の満州事変から太平洋戦争にかけて時代をリードするようになる。昭和五年（一九三〇）には、ロンドン軍縮条約反対などの海軍の動きに刺激された参謀本部の橋本欣五郎中佐（二三期）らにより桜会が結成され、国家改造運動に積極的に関わっていった。⁴⁰⁾

こうした二つの潮流は、大正から昭和初期にかけては国際協調平和路線が、天皇、元老や彼らに支持される政府首脳たちによって、国家の主流となっていた。しかし、恐慌克服のための模索や、軍縮に対する軍部の危機意識などによって、次第に軍拡と戦争への道が具現化されていった。

その推進力となったのが軍部による国防国家建設のための国家改造運動であり、ときに対外的軍事進攻、ときに対内的なテロ・クーデターとその利用によって、劇的になされていった。そうした軍部の動きに連動し、あるいは影響を受け、皇族軍人たちも時代に対応していった。欧州で自由を満喫していた年長世代は、帰国後、国家改造運動側に傾いていったのである。そこには大正天皇や皇太子裕仁に対する微妙な反発意識も作用していた。⁴¹⁾

IV 皇太子裕仁への低い評価

1 奈良武次東宮武官長の就任

東久邇宮稔彦王が欧州に留学した大正九年（一九二〇）、皇太子裕仁の東宮武官長に奈良武次が就任した。奈良は七月十九日、東宮御所にて皇太子裕仁に拝謁し、浜尾新、入江為守ら宮中側近より事務上の説明を聴いた。⁴²⁾

当時、大正天皇の病状悪化により、皇太子裕仁への期待が高まっていたが、元老や高官たちの皇太子への評価は低かった。東宮武官長に就任した奈良は、千種任子典侍をはじめ高級女官に対面し親切なる話を聴き、漸次宮中の模様を知得し、また勤務の余暇に各皇族に回礼、さらに宮内省ならびに陸海軍の官衙および高級者を往訪挨拶し、諸情報

を得た。

この結果、大正天皇は即位後数年は健康であり、元気に乗馬もし、侍従武官も相手に困難だったほどであったこと、大正五年（一九一六）ごろより健康に異常がみえ、乗馬を厭うようになったことなどを⁽⁴³⁾知った。

このため皇太子裕仁の健康、教育、輔導が大いに注目されることとなった。しかし、大正八年（一九一九）の皇太子成年式の祝賀宴会が霞ヶ関離宮で開かれたおり、元老以下が列席したが、「殿下は唯拜謁を賜り御宴に着席遊ばされたるのみにて何にも御話し遊ばされず、何か御話し申上ても殆んど御応答なき」という状態であった。休憩の際に、三浦梧楼子爵が浜尾新東宮大夫を非難攻撃し、「殿下の箱入り御教育の結果なりと大声叱咤」したというほどであった。山県有朋、西園寺公望両元老も皇太子の教育輔導に大革新の必要を感じ、山県は宮内大臣波多野敬直を更迭し、中村雄次郎に替えた。そして、伏見宮貞愛、閑院宮載仁、東伏見宮依仁の三親王と、山県、松方正義、西園寺の三元老の議をまとめて、欧州巡遊を実行させようとした。もともと実母である貞明皇后が「此挙を以て冒険とし御杞憂を懐き」同意しなかった。皇太子裕仁も「恰も石地蔵の如き御態度」、「⁽⁴⁴⁾兵尾の箱入り御教育の如き方針に基因」という状態であった。

大正九年（一九二〇）、大正天皇は日常の政務はともかく軍務は実行不可能となり、皇太子が観兵式と大演習に代理で臨席することとなった。その際、観兵式と賜餐のときは代理として天皇と同様の行動をとるが、大演習は統監を天皇より参謀総長に委任し、皇太子は見学することとしたのであった。さらに皇太子には欧州巡遊の準備のため、自由簡素なる生活を勧め、欧米各国の生活状態などを伝えることとし、奈良武官長は常に皇太子の運動に供奉し、皇太子からゴルフの教習を受け、漸次「お相手の素地」を作っていった。⁽⁴⁵⁾奈良は浜尾の勧めで御学問所でも常に陪聴するようになった。

2 皇太子裕仁に対する軍の教育方針

当時、皇太子の教育方針として、奈良は山県元帥から、「殿下の知識は狭く深きより広く浅きを」、「厳格より自由快闊、對話に慣熟遊ばすこと、人に接して雑話、拜謁を多く賜はること」のほか、「軍事上に重きを置かれ、陸海軍の統帥には関心特に深かるべきこと」、「近衛歩兵隊を召致し、若干の実兵指揮を、明治天皇若年時代の実例に鑑みる」、「兵器の操用に関心を持たれ、射撃も実行を」、「乗馬は熟達」など軍事訓練の必要性を説かれ、かつ「外国語（仏語）を練習、外国人との応接に慣れさせらるべきこと」

などの指摘を受けた。このうち裕仁の軍事教練は、御用掛加藤真一中尉によって進められたが、「唯鳥獸殺生さへも君徳を傷ふと云ふ御意見宮中にあり射撃の御試行を好まざる風、大夫、侍従長には見受けたり」との雰囲気があった。山県らは宮内官らの教育に不満があり、「(東宮) 大夫に対し少し手を引き新武官長に委せよと率直なる忠言をされたることあり」と、軍の命を受けた奈良に主導権を与えようとしていた。⁽⁴⁶⁾

こうした山県や奈良の努力があり、裕仁自身も大いに得るところあつて、裕仁は明朗開闊の気分を持ち、内外人に対する公私の社交も大いに上達していった。ところが、裕仁の開明ぶりとともに、その合理主義的思想が、新たな問題となつた。奈良は、「理性に富ませらるゝ殿下は皇室の祖先が真に神であり、現在の天皇が現人神であるとは信ぜられざる如く、国体は国体として現状を維持すべきも、天皇が神として国民と全く遊離し居るは過ぎたること、考へ居らるゝが如く、皇室は英国の皇室の程度にて、国家国民との関係は君臨すれども統治せずと云ふ程度を可とすとの御感想を洩らさるゝを拝したることあり」と、皇太子の皇室崇拜のあり方に疑問を持った。⁽⁴⁷⁾

第一次世界大戦後のいわゆるデモクラシーの機運が皇太子を覆つたと、奈良はみなしたのである。「勿論第一次欧

州大戦后此空気は世界に勃発し、日本にも余程瀾漫し、元老殊に山県、西園寺両元老の如きさへ余程かぶれ居り、省内省の若手中にも此空氣案外多く、西園寺、二荒、松平の如き其先鋒たりしが如し」ともある。そして、国民中には「皇太子殿下の民衆に対する御会釈御答礼などにも反対する者あり」、「国体は従来の觀念を執りつゝ、国民には漸次接近する方皇室安泰の爲め適當なり」、「君臨すれども統治せずと言ふが如き言辞を弄することは元より慎み」と、デモクラシー時代の皇室の姿勢に対し、奈良なりの悩みも生まれていた。⁽⁴⁸⁾

大正十一年(一九三二)、皇太子は「乗馬に就きては大に熟達」と評価されるようになっていた。一方、奈良は「第一次欧州大戦以来露独両国の皇室崩壊を始め伊白蘭三国皇室の威信衰へ英米仏の民主主義瀾びるに至り日本も之にかぶれ政友会漸次此主義に傾き其勢力を増すに至れる為め国粹主義者は之に対し反感を持ち反対党憲政会は之を利用し内閣打倒を企るが如き感あり」、「国粹主義者中には斯かる政治的關係などを考へず只管日本の国体觀念に馳せ殿下の御行動を批判し御外遊成功を呪ふ者あり、引て牧野宮相珍田大夫等を批判するの声台頭」、「今回の爆彈変死者も此の空氣の現はれの一端にあらざるか」などと、当時の反りベラルな社会情勢を記している。⁽⁴⁹⁾

3 国際軍縮と皇室への違和感

このころワシントン海軍軍縮会議があり、奈良は「日本の主席全権は加藤「友三郎」海軍大臣なりしにも係はらず海軍の厳刻なる制限を承諾したりしことが人心を余程刺激し延て時の内閣随て政友会に反感を惹起したるが如し、国民全体より見れば国費節減の上より真の反対にあらざる迄も内閣攻撃の口実を与へたることは確かなり」とみていた。

この海軍軍縮問題には、諸勢力の様々な思惑があり、ワシントン会議の結果が造船関係に大影響あるため神戸川崎造船所主川崎武之助男爵が松方正義元老を動かし加藤友三郎内閣に圧力をかけたとか、八・八艦隊制を実行した加藤友三郎海相も国家財政の負担に堪えざるを憂慮したとか、軍備の制限縮小は国際連盟の冒頭に規定され世界の輿論とか、陸軍もこれを無視しえず四師団を縮小したとかの、評が立った。ワシントン条約について、奈良は「之が為め一種言ふべからざる禍根を遺し反動を来し日本国を危機の淵に逐ひ込みたる大不幸を免れざりし」と思った。⁽⁵⁰⁾

この軍縮会議をめぐることは、貴族院議長であった徳川家達全権の「失言」問題があった。家達を全権にするにあたっては、原敬首相らの政治的配慮と思惑があり、相応の成果を得られた面もあったが、家達は対米六割か七割かを

めぐる交渉中の記者会見の場で、対米七割は加藤寛治「個人の意見である」、日本政府としては正式に対米七割を主張したわけではないと公言してしまったのである。このため家達への国内の非難の声も生まれたが、条約は無事調印できた。しかし、加藤らはこの後も、対米七割の方針を抱き続けたのである。⁽⁵¹⁾

加藤に象徴されるように、陸海軍内では世界的な軍縮傾向に対する不満が育っていったが、皇室や政府首脳の間には、世界の潮流に肯定的であった。大正天皇も皇太子裕仁も、世界の流れにあえて逆らわず、むしろ欧風のライフスタイルを追求する傾向があり、欧米の主義主張への同調的な態度もみてとれた。

大正天皇はすでに容態が悪かった。皇太子は開明で積極的になったが、過度に「欧風」になり、それがまた軍首脳らを悩ませた。大正十一年（一九二二）、皇太子の信頼を得ていた奈良も、「予等は殿下御渡欧以来の御意圖もあり御殿内の晚餐等には軍服を用ひずモーニング燕尾服等を着用せしも、段々世間の空気も顧慮するの要を感じ、十一月始め珍田大夫にも相談し爾今成るべく軍服を着用すること、したり、但し殿下には何等申上げず」と、密かな抵抗を示した。⁽⁵²⁾

4 昭和改元当時の天皇と首相

大正天皇崩御により、天皇となった皇太子裕仁は「奥(オク)」に「欧風」の改革を求めた。まず、崩御に伴う宮内省制度の一部改正および職員の整理がなされ、珍田捨巳侍従長、河井弥八皇后宮大夫兼侍従次長らが拔擢された。そして入江為守元東宮侍従長は皇太后宮大夫となった。しかし、女官制度の改革は急進的すぎ、皇太后(貞明皇后)との意志の齟齬を生んだ。天皇は、欧州から帰国後はベッドに絨毯、イス式の生活で統一し、和服は一切着なかった。女官改革も、その延長線上にあった。⁽⁵³⁾

一方、「表(オモテ)」である政治向きの問題は、天皇の思うようではなかった。首相の田中義一は、昭和天皇の欧米協調路線とは異なる外交を展開していた。田中首相は、「青島派兵(平時一旅団満州より移す)」、「青島の派兵が済南に進出の件」などをつぎつぎ奏上し、践踏したばかりの天皇に對外進攻の判断を仰ぎ続けた。奈良も、「斯の如く軽忽に軍隊を使用し、己の対支外交の抱負を誇示せんとするは田中首相の癖」「外務大臣の兼任も早く之を止めるを可とす」と、田中に批判的であった。⁽⁵⁴⁾田中は昭和三年になっても、しばしば拝謁し、山東への兵の増派を奏請していた。そして、改元後の宮中側近たちは、田中内閣の天皇への国

務に対する上奏が十分でないことに不満をもっていた。外交や内政に対する天皇および宮中側近と、田中との行き違いが、張作霖爆殺問題処理をめぐる田中内閣が倒壊する伏線となっていたのである。⁽⁵⁵⁾

田中内閣は倒れたが、大正末からの裕仁親王の西欧化と、その過度に過ぎることを懸念する侍従武官長の奈良との認識のずれは、裕仁と軍部主流の一定勢力とのずれとして残った。加えて、海軍軍縮条約をめぐる対立軸が先鋭化し、国防問題をめぐる裕仁と軍令部の間に意識のずれが生じていった。皇族軍人たちはこのずれを「キングの側」に立って修正する方向に動かず、むしろ軍側の論理に引きずられつつ裕仁の意識の修正を試みようとしたのであった。この結果、昭和初期において皇族軍人の政治的活性化が促されていた。

おわりに

ロンドン軍縮問題で顕在化した皇族軍人の昭和天皇への「軽視」は増幅され、二・二六事件へと向かったが、事件で側近を殺傷された天皇の激怒は皇族軍人たちにも伝わり天皇への忠誠心を高めた。とはいえ、国防国家をめざす軍部の攻勢は続き、昭和十二年(一九三七)以後の戦線拡大のなかで、さらに顕著になる。ソ連の参戦を懸念して、日

中戦争の早期解決を求める天皇の意見を、軍部はことごとく無視した。天皇は閑院宮載仁参謀総長に「もしソヴィエトが後から立つたらどうするか」と二度も下問するが、「立たんと思っております」「致し方ございません」と、うやむやにされている。昭和十六年（一九四一）の太平洋洋戦争開始をめぐるやりとりでも、軍部は天皇と巧妙なかけひきを重ねた。軍部側には、参謀本部作戦課員の竹田宮恒徳少佐や軍令部作戦課員の華頂博信少佐（皇族軍人である伏見宮博恭の第三子で臣籍降下した）らがあり、こうした皇族軍人たちが、軍部の側に立って開戦に慎重な天皇を説得する協力をしていった。開戦後も、皇族軍人たちは天皇より軍部側の意向に傾くことが多かった。⁽⁵⁶⁾ 皇族軍人たちが軍部より「キングの側」につくのは昭和二十年の敗戦を確信して以後であるが、そのときでも閑院宮載仁親王を継いだ春仁王は戦争継続を主張していた⁽⁵⁷⁾、高松宮は国体護持のために天皇を幽閉することを考えていた。⁽⁵⁸⁾ 敗戦と軍部崩壊の流れのなかで、昭和初期の皇族の政治的活性化の主要因であった国防国家構想問題は消えたが、天皇と皇族の間の意識の齟齬は、戦後象徴天皇の時代になっても残り、いくつかの事件をひきおこしてきた。

註

- (1) 木戸幸一『木戸幸一日記』上巻（東京大学出版会 一九六六年）一九三六年二月二十六日付、四六四～四六六頁。同前。一九三六年二月二十七日付、四六六頁。
- (2) 同前。一九三六年二月二十八日付、四六七～四六八頁。
- (3) 高松宮宣仁親王『高松宮日記』第二巻（中央公論社 一九九五年）一九三六年二月二十八日付、三九一～三四〇頁。
- (4) 前出『木戸幸一日記』上巻、一九三六年二月二十六日付、四六五頁。
- (5) 同前、一九三六年二月二十八日付、四六八頁。
- (6) 伊藤隆『昭和初期政治史研究——ロンドン海軍軍縮問題をめぐる諸政治集団の対抗と提携』（東京大学出版会 一九六九年）は、昭和初期にロンドン海軍軍縮条約をめぐって政界再編の動きが活性化したことを論じた。伊藤は「復古革新派」の政治的台頭が、昭和初期の政治的活性化の動因であることを指摘している。もともと、この「復古革新」派とは、ファシズム論の文脈からすれば「疑似革新派」（ドイツでは「疑似革命」なる概念だが、日本では「革命」というより「革新」としたほうが実態的といえる）とみなすこともでき、日本におけるファシズム体制を否定するにせよ、肯定するにせよ、昭和初期に一定の政治的活性化と政界再編の動きがあったことへの認識は、共通している。本稿は、そうした視点に立って、昭和初期の天皇と皇族の政治的活性化の背景にあった論理を分析しようとするものである。
- (8) 小田部雄次『皇族』（中央公論社 二〇〇九年）一八四

（二〇九頁）。

- (9) 原田熊雄述『西園寺公と政局』第一卷（岩波書店 一九五〇年）七〇頁。
- (10) 同前。一〇九～一一〇頁。
- (11) 小田部雄次『軍縮の時代』と天皇・宮中」（『河井弥八日記』第四卷 岩波書店 一九九四年）。
- (12) 前出『西園寺公と政局』第一卷 一九二頁。
- (13) 生出寿『昭和天皇に背いた伏見宮元帥』（徳間書店 一九九一年）。浅見雅男『伏見宮』（講談社 二〇一二年）。大阪毎日新聞社『皇太子殿下 御渡欧記念写真帖』全十卷（一九二二年）ほか東宮外遊当時の多くの写真には、常に皇太子裕仁に随伴する閑院宮が写っている。この随伴は「東宮殿下御一人では主客の御釣合」がとれないので、「東宮殿下の御輔導として御経験あり且御相識ある我が皇族殿下御一方」の同伴を必要とし、閑院宮が第一候補にあげられたのである。万が一の場合は、東伏見宮依仁親王が予定されていたが、閑院宮に決定した。当時の閑院宮は、内外の人望をもっとも集めていた皇族だったといえる。
- (15) 前出『木戸幸一日記』一九三二年八月七日付、九二～九三頁。
- (16) 同前。一九三一年九月十九日付、一〇〇頁。
- (17) 同前。一九三五年九月十三日付、四二九頁。
- (18) 同前。一九三六年三月一日付、四七〇頁。
- (19) 浅見雅男『皇族と帝国陸海軍』（文藝春秋社 二〇一〇年）。
- (20) 皇族軍人の誕生とその歴史については、松下芳男『日本

軍事史叢話』（土屋書店、一九六三年）、同『日本軍制史

論 改定版』（国書刊行会、一九七八年）、高久嶺之介

「天皇の家 明治期における皇族の位置」（同志社大学人

文学研究所編『日本の家』国書刊行会 一九八一年）、

同「近代皇族の権威集団化過程（一）（二）」（同志社大

学『社会科学』第二八、二九号 一九八一年）、坂本悠

一「皇族軍人の誕生」（岩井忠熊編『近代日本社会と天

皇制』柏書房 一九八八年）などに詳しい。

(21) 『東京朝日新聞』「閑院宮の御功績」（一八九四年十一月十六日）

(22) 坂本辰之助『皇室及皇族』（昭文堂 一九〇九年）

(23) 神田豊穂『皇室皇族聖鑑（大正編）』（皇室皇族聖鑑刊行

会 一九三三年）一六一～一六二頁。

(24) 『東京朝日新聞』「閑院宮の御偉勲」（一九〇五年十一月八日）。

(25) 前出『皇室及皇族』四一三頁。

(26) 『東京朝日新聞』（一九〇五年八月十五日）は、「博恭王

御軽傷」と題して「十日の大海戦に於て三笠乗組の少佐

博恭王殿下（始め華頂宮と申し今は伏見若宮と称し奉る）

は御負傷遊ばされたり但し至つて御軽傷にて砲創に非ず

木片の触れたるのみにて御呼器に変化なく僅に胸痛ある

のみ御元氣甚だ宜しと申す」と伝えた。ところが、翌十

六日には「博恭王御勇戦」の記事となり、「殿下御座乗

の三笠艦外一艦に対する敵弾の放射は頗る猛烈を極めて、

（中略）破裂したる敵弾は幾多の我健児を奪ひ、殿下の

就かせられたる御配置の前後左右には算を乱して死傷者

相枕籍するに至り、頗る惨絶の光景を呈したる。一刹那

敵弾の破片殿下の御肩より吊し給へる望遠鏡に中りて側面に外れたるため、幸に御体には触れざりしも当時非常の打撲疼痛を感じ給ひし由に詳聞す」と重大事故として扱われた。

(27) 前出『皇族と帝国陸海軍』一一三～一一八頁。

(28) 同前。一一八頁。

(29) 小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記』（小学館 一九九一年）五七～五八頁。

(30) 同前。八三～九二頁。

(31) たとえば、広岡裕児『皇族』（読売新聞社 一九九八年）は、朝香宮は当時の北白川宮夫妻の日常を「北伯夫人「房子妃」は語学の先生と一緒に踊る稽古をして居られます。北伯「成久王」は上手に西洋婦人と踊られます。北伯はよく遊ばれ有名です」（八七頁）と書いている。

(32) 当時の『東京朝日新聞』には、「北白川宮成久王殿下 仏国で突然薨去 自動車事故のため 御同乗の妃殿下と朝香宮殿下も御重傷」（一九二三年四月三日）、「膳飯屋にまで立寄られて御研究 瞬くうちに仏国通の北白川宮」（同年四月四日）、「今日の問題」（同年四月四日）、「巴里の各宮方（一）」（二二）（同年十一月三十日、十二月一日、十二月二日）などの報道がなされた。

(33) 同前「御忙しき東久邇宮殿下 お一人御奔走」（一九二三年四月六日）、「東久邇宮殿下の御接待振り 御用意周到に申問の者に進んで御挨拶」（同年四月七日）。

(34) 東久邇宮稔彦『やんちゃ孤独』（読売新聞社 一九五五年）六四～一一八頁。

(35) 浅見雅夫『不思議な宮様』（文藝春秋社 二〇一二年）

(36) 前出『やんちゃ孤独』一一六～一一八頁。

(37) 近衛文麿『英米本位の平和主義を排す』（『日本及日本人』一九一八年）

(38) 二荒芳徳・沢田節蔵『皇太子殿下御外遊記』大阪毎日新聞・東京日日新聞 一九二三年。

(39) 水野広徳については、水野広徳著作刊行会「反骨の軍人・水野広徳」（経済往来社、一九七八年）、松下芳男著・前坂俊之編『海軍大佐の反戦 水野広徳』（雄山閣、一九九三年）、栗屋憲太郎・前坂俊之編『水野広徳著作集』（雄山閣、一九九五年）、河田宏『第一次世界大戦と水野広徳』（三二書房、一九九六年）などがある。

(40) 陸軍内の国家改造運動に向けての胎動は、たとえば、高宮太平『順逆の昭和史』（原書房、一九七一年）、秦郁彦『軍ファシズム運動史 増補版』（河出書房新社、一九七二年）などに詳しい。

(41) 小田部雄次『天皇と宮家』（新人物往来社 二〇一〇年）。

(42) 奈良武次『侍従武官長奈良武次日記・回想録』（柏書房 二〇〇〇年）一一二頁。

(43) 同前。奈良は大正天皇について、「大正六年七年の親兵式を宮城前広場にて挙行し世上の非難を招きたることあり」、「大正八年大阪附近の大演習御統監の際は御乗馬を怖れさせらる、御模様にて山県「有朋」元帥等大に心配したりとのことなり」、「大正九年の大演習は最早御統監遊ばされ難き御状態なりし」、「自然国民の知る所となり人心一般に沈喪し皇室及国家の前途に就き杞憂を懐くに至れり」と記している（一一三頁）。

- (44) 同前。一一三～一一六頁
- (45) 同前。一一七～一一八頁。
- (46) 同前。一一八頁～一九九頁。ちなみに、奈良は皇太子裕仁親王の軍事教練について、「十月始頃より東宮御所内に塹壕を掘り機関銃操練、狭窄射撃、歩兵小部隊の教練等を行なはせられ、戸山学校内の射撃場にて小銃射撃を行はせらる、等軍事教練に御精進を御願ひ申上げ此冬の沼津行啓のときまで継続したり」、「東宮殿下の御体格は兎も角外観上御姿勢良好ならずとの評は免れざる所」、「侍医寮の規定にて毎朝拝診御体温を計り検便し居ることが殿下の御精神に及ず影響如何とは侍従や武官の間にも議論あり」などと綴っている。
- (47) 同前。一二七頁。
- (48) 同前。一二七頁。
- (49) 同前。一二九頁。ちなみに、奈良が記した「爆弾変死者」とは、同年三月十七日に発生した、滋賀県出身の藤田留次郎による二重橋での爆弾事件のことである。
- (50) 同前。一二九頁。
- (51) 原口大輔「ワシントン会議前後の徳川家達とその政治的位置」(九州史学研究会『九州史学』一六八号 二〇一四年三月)
- (52) 同前。一三三頁。
- (53) 高橋紘「昭和天皇の女官改革」(『河井弥八日記』第二巻 岩波書店 一九九三年)。
- (54) 前出『侍従武官長奈良武次日記・回想録』一四八頁。
- (55) 栗屋憲太郎「田中内閣前後の政局と天皇・宮中」(前出『河井弥八日記』第三巻 一九九三年)。
- (56) 山田朗『大元帥・昭和天皇』(新日本出版社 一九九四年)。
- (57) 閑院宮純仁『私の自叙伝』(人物往来社 一九六六年) 三八〇～三八六頁。
- (58) 高橋紘・鈴木邦彦『裕仁法皇』を幽閉せよ」(『天皇家の密使たち』現代史出版会 一九八一年)。
(静岡福祉大学社会福祉学部教授)